



Echo No. 179

令和8年 正月号

院寺寺
峰福林禅
一禅禅宗
* * * *
羽村臨済会

次の八十年で仏国土を

昨年の令和七年は昭和百年、大東亜戦争の戦後八十年の年でした(ちなみに、日露戦争から百二十年の年でもありました)。なかでも戦後八十年が最も注目され、多くの論説が世に出ました。八十年が速いか遅いか、人によって様々ですが、未だに敗戦の影響は残っています。

今や戦前の空気を知ることが至難の業となつていますが、多くの人は何となく暗く遅れた時代だと思つていようです。これはマスコミと戦後教育の賜ですが、本当にそうだったのかには、疑問符が付きます。山本夏彦が「誰か戦前を知

らないか」という本を書いています。戦前の本当の空気を知る一助となります。

例えば、硫黄島で米軍から日本を守った栗林忠道、ソ連軍から北海道を守った樋口季一郎、戦後の台湾を中国共産党軍から救った根本博などは、相当高度な精神教育を受けていなければ、決して生まれない勝れた人材です。果たして八十年後の現在の教育で、自分の命を犠牲にしてまで他者のために尽くす、菩薩のような人を輩出できるのでしょうか。

現代を歴史的に見れば、神道と仏教に培われてきた日本人の心が、八十年かかっ

て消えようとしているのです。GHQに仕組まれたとは言え、易々と連綿たる歴史と伝統を捨ててしまったその報いが、今日の無残な姿となつていっているのです。それは神にも仏にも関心がなく、愛国心も慈悲心も道徳心もない政治家や官僚やメディアに如実に顕れています。

先祖供養を専らとする寺院以外にも、日本には天照大神を祀る伊勢神宮、菅原道真を祀る天満宮、徳川家康を祀る東照宮、明治天皇を祀る明治神宮、戊辰戦争以来の戦死者を祀る靖国神社など、先人を神として祀る神社が全国にあります。

日本列島はまことに精神性に富んだ土地なのです。このような尊い土地に住まわせてもらっている有難さを、我々は改めて噛みしめるべきでしょう。この貴重な国土を無神論で蓋つてはいけません。八十年で失った精神を次の八十年で取り戻したいものです。

(禅福 泰文)



禅語に学ぶ

絶好調な時こそ冷静に

新しい年が始まりました。皆さまにお

かれましては、本年も良い年でありますよう、心よりお祈り申しあげます。

子どもの頃の私にとって、新年を迎えることは一年を通して大変待ち望んでいたことでした。それは勿論、家族や親族からお年玉が頂けるからです。

しかし、有り難く頂いたお年玉も、親の忠告を聞かず調子に乗って使い込んでしまい、心の底から絶望したことがあります。それも今となっては良い教訓です。このような経験は、決して私だけではないと思っています。

お年玉のみならず、様々なことにおいて「調子に乗っていたら痛い目を見た」という経験をされた方がいらっしやると思います。

そこで今回は、絶好調の時こそ冷静になれるような禅語を紹介させて頂きます。

勢不可使尽

(勢い使い尽くすべからず)

この禅語は、宋代の僧である五祖法演禪師が、弟子の圓悟克勤禪師が住職になる際に与えた「法演の四戒」の一つ、「勢い使い尽くさば、禍必ず至る」からきています。

調子に乗り、周囲の助言も聞かず自分が正しいと突っ走っていると、必ず悪いことが起こるぞ、ということなのです。

「なぜか調子が良い」や「自分の思い通りにことが進んでいく」、そんな勢いがのりにのっているとき、個人の人生であっても企業であっても、そのままの勢いに任せて突っ走っていきたくなるものです。

失敗したときや悪い出来事が起こったときは、反省したり慎重に行動したりするのは当たり前のことですが、順調に物事が進んでいるときは、前に進むことは

かり考え、今の自分自身に目を向けることが出来にくくなってしまう。

「勢不可使尽」という禅語は、絶好調な時こそ冷静に、周囲の意見に耳を傾け、自分自身を見つめ直させてくれる言葉なのです。

この一年を通し、何回か絶好調な日があるかと思えます。絶好調の勢いに乗ることも必要かもしれませんが、時には今回の禅語を思い出し、絶好調でも慎重にことを運ばれてみてはいかがでしょうか。

(禅福 尚玄)



禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XXII

臨臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思ひます。

鉄舟の剣5

鉄舟の興した無刀流の免許皆伝につながる試練、「誓願」ですが、その最終段階となる第三期では一日あたり二百面の試合を立ち切りで一週間おこないます。

この立ち切り試合は、技術の進歩をはかるのが目的ではなく、身心を打失して無我になり、至誠一片になる、つまり無刀流の名の元になる「無の心刀」を磨く事が主眼とされています。立ち切り試合

の本人は、その字の通り立ち切りで入れかわって立ち向かう新手を相手に朝から夕方まで試合をします。しまいには体力の限界をむかえ腕力や少々の技術では通じなくなってきました。そこをさらに撓ま

ずに乗り越えていくと、雑念妄想も消え失せ、心身を打失するところに至るのです。普通われわれはそこに至るまでやりぬかず、中途で妄念と妥協してしまうから妙境に入れぬまま終わってしまうのですが、試合となれば相手のある事ですので妥協する暇もないといえ、半ば強制的に心身打失の状況を作っているといえるものでした。

しかし鉄舟がなみなみならぬ想いで作った「誓願」は、結局透過する者が出ないまま終わってしまったのでした。やはり体力的にも精神的にも格別の天分をもっていた鉄舟の考える方法論は、なかなか一般人には通用しないものだった様です。

高野佐三郎

昭和の剣豪に高野佐三郎（文久2年

1862年—昭和25年1950年）という人がいます。

明治12年、高野が16歳の時、地元で剣道大会が開かれました。剣道場明信館の館長を祖父に持ち、「秩父の小天狗」と異名をとるほどの腕前を持っていた高野は、病気の祖父の代理としてこの大会に参加したのでした。

相手となったのは高崎に英隆館という道場を開いていた岡田定五郎というものでした。岡田はこの年、30歳。剣術家として脂の載った頃といえるでしょう。

佐三郎は幼少より祖父より剣術の英才教育を受け、数えの5歳（満年齢で3〜4歳）で祖父と五十六本にも及ぶ組太刀を殿様の前で見事に演じとげるといふ奇才ぶりを発揮し、その高名は轟いていました。少し傲慢になつていたかもしれせん。岡田との試合で高野は得意の片手上段に竹刀を構えましたが、その際年上の岡田に不遜にも「失礼します」とも言

わなかつたのです。以下次号（二峰 義紹）

禪寺雜記帳

◆昨秋のアメリカ大リーグのワールドシリーズは、日本人の大谷翔平、山本由伸、佐々木朗希の3選手が大活躍して優勝に貢献しました。先に4勝をした方が勝つ訳ですが、そのうちの3勝を山本選手が上げました。この大活躍によって山本選手はシリーズのMVPに選ばれました。

◆投手はある程度の球数を投げるとその疲労から数日は身体が動かないそうで、山本選手も日本のプロ野球でプレーを始めた当初は5回を投げると10日の休養が必要だったと話しています。肘に痛みもあり、プロ1年目の途中からその改善の為に矢田修さんというトレーナーから指導を受けることで、連投が可能な身体になり、世界一の投手になったのです。

◆山本選手のトレーニングの様子を記録した映像を見ると、全身を全て使う30種類の基礎運動を3時間かけて行い、そ

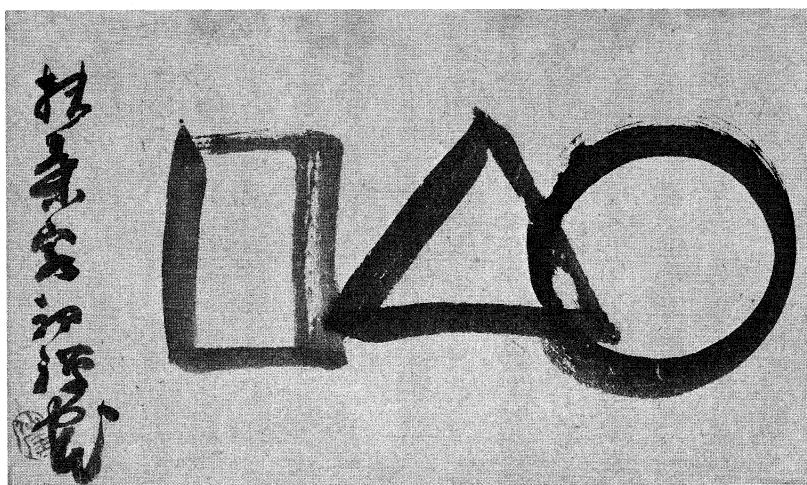
の後もダッシュやハードル走、やり投げなど様々なメニューを行い、ようやく実際に球を投げるまでに6時間、そこから1球ずつを丁寧に確認しながら投げ込む、これを週に6日行っているというのです。

やはり世界一には理由があつたのです。

◆矢田先生は「今はすぐに結果が求められるが、その為にすぐに「答え」を求めるとをやめなさい。自分の中でどれだけの「問題」を発見出来るかが大切で、「問題」を発見出来たらその解決の為にしっかり悩み続けなさい」と指導するそうです。

◆山本選手が基礎練習を行う矢田先生のジムの壁には、江戸時代の禅僧、仙厓和尚の『○△□』の書(複製)が飾られていました。海外でも有名な、解釈が難しい禅画です。仙厓和尚の書は親しみやすい絵に、普通は賛が書かれており何を表現しているか判るのですが、この書には図だけで賛がありません、見る者に解釈

を委ねて「問題」を提起しているのです。「答えを求めな」という矢田先生の考えには禅の影響もあつて、それが山本選手の活躍の一因なのだと思つて、とても嬉しくなりました。(禅林 恭山)



仙厓和尚『○△□』(出光美術館蔵)